

ナウシカの慰め

昭和五十年入学 稲賀 繁美

十年以上の歳月を費やし、断続的に描き継がれた末に、ようやく九四年に完結したコミック版『風の谷のナウシカ』が、あらためて全巻まとめて出版されてから一年が経とうとしている。そのかん阪神・淡路には震災があり、地下鉄にはサリンが撒かれ、毒グモにも殺虫剤が撒かれ、そしてオウム教団は日本から「浄化」されようとしていて、学校の仲間はずれもいじめられて、自殺してはこの世から「浄化」されている。振り返れば、かつて大学祭で年下の仲間たちが全長3メートルのオウムの20分の1模型の神輿やトトロの実物大ハリボテを作ったことを思い出した。オウムは重くてもちあがらず、トトロは寸法がでかすぎて——いまや廃寮となった——住処の扉につかえたりもした。少年たちをそこまで熱中させたのは何だったのだろうか。その世代に属する若き政治思想研究家、稲葉振一郎からは『ナウシカ読解』が出版されて、哲学書など全然売れない三重大大学の生協でもけっこう捌けているという。

この長大な物語の複雑なプロットの底流にあるのは、まず血の汚れと癒しの教訓だろう。ナウシカの指の血を嘗めて柔順になる野性のキツネリス、テト。ナウシカの服を染めたオウムの血を感じて怒りを静める巨大な甲虫。自らの血と生命とを代価にマニの民の怨念と復讐心

を癒すユパ。

だがさらにコミック版『ナウシカ』は、宮崎駿の名を広めた八四年の映画版を全面的に自己否定する。オウムや巨大な昆虫たちの集団自殺に至る彷徨は、自然と人間との調和といった安直な夢を碎き、自己犠牲という観念をも乗り越えて、食らい食らわれあう相互依存の関係のなかに身をおく生態系の「愛」を示す。また核兵器のアレゴリーたる巨神兵は、もはや文明の悲惨と無力の象徴ではなく、毒を撒き散らす善なる無垢という矛盾を具現して、政治倫理の原点にあるアポリアを炙りだす。そして致死性の瘴気を発する巨大なウマゴヤシの森は、同時に世界の浄化装置でもあるという二面性を備えるが、その浄化された世界とは、もはや人間の生存をも拒むデストピアでしかない。ここにユートピア否定の痛烈などんでん返しが仕込まれる。

血の汚辱にまみれたこの世の煉獄にこそ生命の尊厳を許す約束の土地を見る、この脱エコロジカルな思想。そこにはルワンダやボスニアの民族浄化の末路、そしてオウム真理教のハルマゲドンが約束したはずの希望の理想郷の虚構性が暴かれている。一神教の根底に潜む「浄化」の思想への痛烈な批判。

ニーチェはどこかで神とはそれなくしては人類が生きることでしかないような虚構であると喝破した。だが人間が捏造したその「浄化の神」もまた、物語の終局でみずからの破壊による出血によってその罪を贖い、ナウシカは「約束の土地」を——虚偽と知りながら——人々に説き、あらたな創成神話を残して人跡未踏の聖なる森の奥深くに去

る。

『森のバロック』なる南方熊楠の粘菌哲学への拘りや、『「森の思想」が人類を救う』の著者への根深い違和感をも宿しながら、『免疫の意味論』や、『大乘起信論の哲学』とも遥かに共鳴しつつ、鎮守の森の野性への畏怖をも隠さぬかつての昆虫少年の夢は、ギリシア神話の脇役たる「女吟遊詩人」の草分けと倭国の「虫めづる姫君」との混血児のなかに、新たな『血と大地』の危険をも孕んだ「導き手」Führer (三) を造形した。浄化による人類絶滅のプログラムを内蔵した「聖都のシュワ」はいまひとつの『シヨアー』であり、生態系の壊滅的暴走たる「大海嘯」は、二〇〇五年愛知万博予定会場の海上「かいしょ」の森の破壊の寓意ともえなりえよう。この森なす物語には、なお汲み尽くされぬ恐るべき射程を秘めた予言が、数多く潜んでいる。

(初出 図書新聞一九九六年六月二六日)